

聖書 イザヤ書 63：8～9／ガラテヤの信徒への手紙 2：19～20
説教 『キリストを内に迎えた私』 山本 護牧師

チェロを習いたいという人がクチコミで訪れ、現在の生徒を数えてみたら9名。経験者も初心者もいるが、演奏する上でくり返し指摘するのは「脱力」。いわゆる「良い音」が出ないのは、その人ならではの偏った力による。つまり個性がその人を縛ってしまうのだ。自分に妨げられているうちは皆一様に瘦せた音なのだが、脱力ができてたっぷり響くと、その人に固有の音色が初めて現れる。

「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法に死んだ(ガラテヤ 2:19a)」。律法、すなわち私に関する世の評価は「死んだ」。だから自惚れも悲観も無い、はずだ。「わたしは、キリストと共に十字架につけられている(2:19b)」。肯定するにせよ、否定するにせよ、自分を過大に扱う自己愛は、十字架によって消滅している。それにしても人間はなぜ、これほどまでに自分が気になるのか。

一般に誰でも、本を読んでいても、話をしていても、その内容を自分に当てはめ、比較しながら考える。なぜだろうか。自己を誇りたい、皆に褒められたいということだけに限らない。控えめにでも、本当の自分とは何か、どう生きればいいのか、私に存在価値があるのか、死後はどうなるのか、といったことを知りたいのだろう。言い換えれば、自分の人生に「納得」したいのだと思う。血液型性格診断や占いは、寄る辺ない私を何かに位置づけてくれる。御先祖様や前世は、私の生を超えた特別性を与えてくれる。気休めでも、私を「保証」してくれるなら、どんな幻想でもいいのだろうか。

「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられる(2:20a)」。この御言葉は、「私とは何か」という根本的な問いに、まっすぐ答えている。もはや私には、本当の自分とか、存在価値があるのか、といった脅迫観念はなく、他者による評価も必要ではない。「キリストがわたしの内に生きておられる」から。キリストと共に生きている私は、もう張りぼてではない。幻想を引き寄せて、右往左往させられることもない。神による真実が、私自身に現われているからだ。

私は、「私」を放り出してしまったのか、「私」は無色透明になったのか。決してそうではない。むしろ逆だ。「キリストがわたしの内に」とは、「私」が失われることではなく、以前よりも確かな、力あふれる「私」になること。力が入り過ぎてささくれた雑音が、真の「個性」に束ねられること。

私がこんな「私」を得るために、キリストは十字架にかかった。つまり「わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子(2:20b)」がおられた。なんということか、私がこの「私」を獲得するために、神の、それほどまでの犠牲があったとは。そんな「神の子に対する信仰(2:20b)」によって、「キリストがわたしの内に生きておられる(2:20a)」。「神の子が身を献げる」ほどに私は愛されている。

「愛と憐れみをもって彼らを贖い、昔から常に、彼らを負い、彼らを担ってくださった(イザヤ 63:9)」。神の愛と憐れみに忠実であったがために、キリストの十字架が起こった。それほどに私たちは愛され、かつ求められている。「主は言われた。彼らはわたしの民、偽りのない子らである、と(6:3:8)」。私たちは偽りのない神の子として、他の誰とも違う、キリストに結ばれた真なる私の響きを発現させたい。



【おまけのひとこと】

神の命を賭して「私」が愛されている 放り出したり 過剰包装したり もはや好き勝手にできるほど「私」所有ではない 内に抱えたキリストを あの人とは違う 私の声で 私の言葉で語ろう